

## 編 集 後 記

会員の皆様は新しい年を迎え新たな気持ちで臨床に研究に、そして教育に取り組まれていることと思います。外科医というのは、それぞれ立場は異なっても、ほぼ全ての人が診療、研究、教育の何れにも携わらざるを得ない職業の一つです。そのような観点から本誌を見てみますと、我が国における消化器外科学の全般をカバーする基幹学会の機関誌として、全ての会員へ母国語により様々な情報を提供するという重要な役割を担っています。中でも研究論文の掲載が最も大きなウエイトを占め、編集委員の主要な任務は投稿論文の査読です。編集委員として会員諸兄諸姉の臨床経験や研究内容をいち早く読ませていただけるのは大変幸運なことだと感じています。

さて、今月号には、原著3編、症例報告23編が掲載されています。以前にも書きましたが、和文誌への原著論文の投稿が減少したと言われるようになったのは随分と前の事で、本誌でも同様の傾向がみられます。田中論文は手術リスク評価法の一つである POSSUM を独自に改良し精度を検証した原著論文ですが、本論文自体の意義はもとより、和文であることから POSSUM に関する理解が会員の間でより深まることが期待されます。最近では学位を取得するための研究発表は実質上英文に限り認める施設が多いようですが、和文でなければ表現し難い消化器外科関連の臨床研究も国内で多く行われていると思いますので、本誌はその良い受け皿の一つでもあります。

一方、症例報告としては常に多数の論文が寄せられています。そのまま掲載できるほどまとまった報告がある一方で、新奇性や希少性などに欠け、あるいは投稿規定から逸脱する論文も稀に見られます。その症例を報告することの意義を吟味すると共に体裁を整えることは必要最小限の作業であり、指導者の十分なチェックをお願いしたいと思います。原著であれ症例報告であれ、投稿された論文が医学・医療の発展に寄与する何らかの内容を含み、投稿規定に沿ったものであれば、編集委員会や事務局が本誌に掲載されるようできるだけの協力を致します。診療、研究、教育という本来業務の一部として、会員の皆様が持っておられる貴重な研究成果や臨床経験をぜひとも本誌へ投稿していただき、エビデンスとして残していただきたいと願っています。

(河野辰幸)